Agritech-plus

「青果物輸出産地セミナー＆マッチングin関西」

農業分野における技術の活用及び海外展開

株式会社アグリテックプラス

前田 光樹

アグリテックプラスとは

農業分野における技術やノウハウを提供する会社

- **AGRONOMIST（農業のエキスパート）**として、農業を俯瞰で捉え、一貫的な戦略に基づいた計画を練って、フィールド研究や実践を通して農業分野で成果を出す
  - 植物バイオテクノロジー技術指導のため、インドネシア(3年)、中国(4年)、タイ(7年)で活動
  - 海外での活動の中で、農業に関わるほぼ全ての業務（育種・苗生産・成品生産・流通・貿易・販売など）に携わる

事業概要① ～いちごの出荷

前田ストロベリー研究所として奈良県のいちご出荷グループ「奈良いちごラボ」に参加し、高級いちごブランド作りに取り組む

奈良いちごラボ（イチゴ出荷グループ）

- **前田ストロベリー研究所**
- すぎざきふぁーむ
- いちご太郎
- 東バラ園
- いちごの巽

直接取引なし ✕

農協・市場・仲卸

7割 → 【海外】
- 香港
- 台湾
- タイ
- 欧米 等

3割 → 【国内】

インバウンド需要が中心だったが、コロナ禍を期に輸出量は増加！
ただし、奈良いちごラボは海外展開に積極的ではない

事業概要② ～技術の海外展開

アグリテックプラスの設立と平行して立ち上げた「J-berry」を通じて、開発した技術やノウハウを海外に展開

アグリテックプラス → **J-berry（いちご出荷グループ）ブランド名：「ICHIGO」** → 海外

＜いちごの周年出荷＞

- 外の温室にて「一季成イチゴの周年生産」を世界で初めて成功
- 独自開発した「ハイブリッド型植物工場」と合わせて武器に！

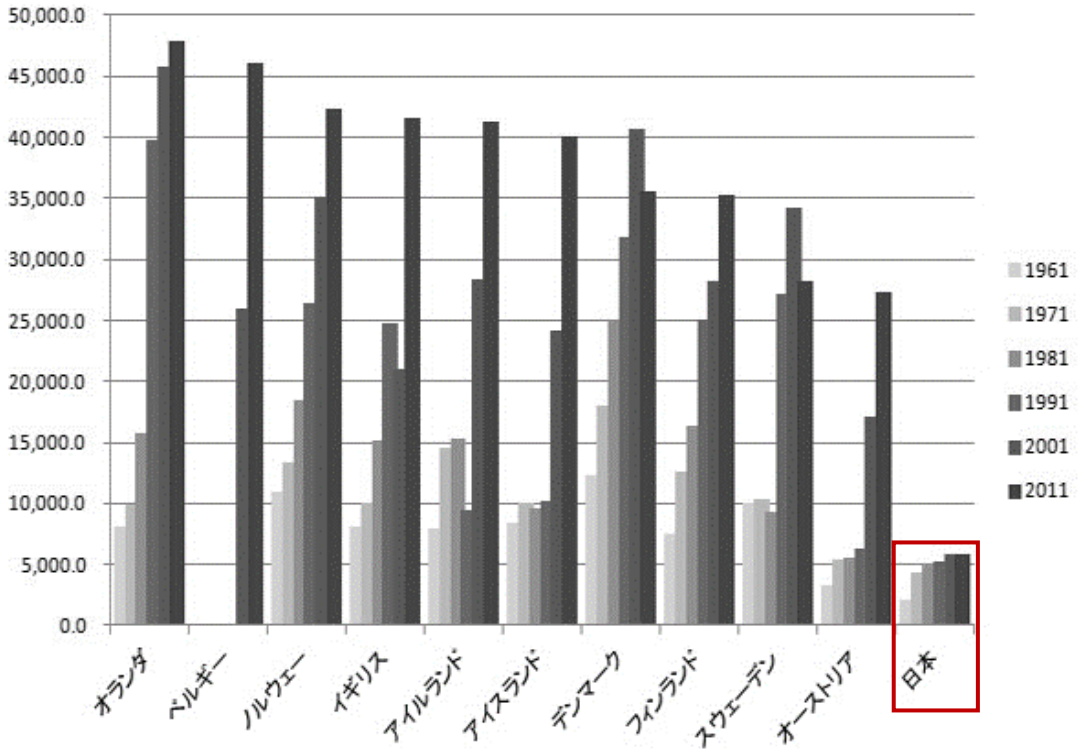
＜密植栽培＞

- 単位面積当りの収穫量を飛躍的に伸ばす為の技術を開発し、オリジナル品種の開発、輸出用容器の開発などを進める
- 技術を活用できる生産者は、現在、北海道2社、静岡1社、大阪2社
  ※うち2社はこれから生産予定
  ※今後、規模拡大orメンバー募集を実施予定

日本の農業の問題点

単位面積当たりの収量が伸びないという日本の農業課題を解決し、「儲かる農業」への転換が必要

単位面積当たりのトマトの収量(kg/10a)



- 近年、農作物の輸出量を増やすという話が多く出始めているが、**日本の農業は世界的にも遅れており後進国**である
  - 日本は唯一先進国の中で30年間単位面積当りの収量が伸びていない

FoodWatchJapan,世界各国と日本の農産物単位面積当たりの収穫量の比較, https://www.foodwatch.jp/goodagriextra001

なぜ単位面積当たりの収量が伸びないのか？

利益を追求し、生み出す農産業の体制が構築できていない

原因	概要
マニュアルを中心とした個人単位の農業	• マニュアルの積み上げが中心で、変化する事へのリスクばかり恐れて先に進めない体質となっている ➢ 例）同じ地域、施設、品種で栽培しても農家毎に収量や品質に大きな差が生まれる。マニュアルによる差であり、原理原則を理解していない • 各農家が作っている規格・パレット等がバラバラだが、揃っていれば海外にも提案しやすい
利益を追求する法人の参入障壁	• 法人の参入が色々な障壁で行われないのも農産業に発展できない原因となっている ➢「日本の農業における問題点」を解決する技術を開発 ➢ 例）農地利用問題を解決する「どこでもできる植物工場」は、法人も参入しやすく、現在5社と話を進めている

戦略に沿った技術開発

「実用性が高く有用な技術」を短い期間で開発するためには戦略に沿った観点からの手段の取捨選択が重要

戦略①単位面積当りの収量増

- 「周年栽培」・「密植栽培」の技術開発
  - 通常よりたくさん収穫でき、誰も作れない時期に産品を出荷できる手段を手にした

戦略②海外へのグローバル展開

- グローバル展開に向けたアプローチ
  - 日本国内の産品を輸出(川下～出口)
  - **開発した技術を海外普及してお金に換える**(川上)

- 日本は農地も狭く、まとまった農地も少なく、大量に効率よく農作物を生産するのは不向きだが、**品種改良や技術の開発など海外からも信頼された確かな開発能力がある**
  - 技術(川上)を抑える事で国際的にも農業の分野においてコントロールが可能になる

技術分野でのグローバル展開の遅れ

海外展開のリスクばかりに目を向けず
もっと危機感を持って輸出に踏み込むべき

- 日本における技術分野のグローバル展開は非常に遅れており、**膨大な機会損失を重ねている**
  - ➢ 海外では流出した品種 (シャインマスカット・イチゴ・サツマイモなど) を利用して産業化を進め、技術面も真似して海外展開を進めて利益を上げている
    - ✓ 胡蝶蘭についてはかつて台湾が日本からノウハウを学び、現在では9割の世界シェアを占めている
    - ✓ 日本発の植物バイオ産業は下請け利用してきた東南アジアに生産技術を使われ世界シェアをとられた
- 既に流出している品種や技術で、本来であれば日本人が享受できるはずだった「日本産品の海外シェア」はどんどん海外企業に先押さえられ、**日本産品の信用だけが利用されるカタチで、利益も何も享受できずに終わってしまう**可能性が高い

技術開発の縦割りからの脱却

公的機関だけでなく民間事業者による技術開発が台頭できる環境作りが必要

- 日本では、県単位で税金を使って技術開発が行われている比率が高く、開発された技術や品種は県内の農家しか利用できない縦割りの縛りが強い
- 技術にお金を払うという意識が低く民間の技術開発会社が台頭出来にくい環境
  - 技術開発はお金を回収するスパンが長くリスクも高いが、それを怠ると海外の技術にお金を払って利用する羽目になりかねない

輸出に関わる取組①梱包技術

高い梱包技術とデザイン性で顧客の信用を獲得

- 「奈良いちごラボ」は海外輸出に対し、完璧な状態で産品を届けるという意識が高く、梱包技術を磨いてきた
  - ➢ 適切な輸送を行えば問題ない状態で納品が可能で、その信用が「ブランド」になっている
  - ➢ 梱包資材は単なる輸送資材としてだけでなく、見た目から喜んでもらえるようデザイン性を追求して多種多様な規格を作り、それを適所に当てはめて投入して高単価を維持している
- 競合品のない商品作りに成功したが、一方で**手間暇にかかる人件費、資材類の高コスト化が今後の課題**

輸出に関わる取組②「ICHIGO」ブランド

ブランドを通じて技術や多種多様な品種の取り扱いを可能に！

ICHIGO
JAPANESE STRAWBERRY
Uniquely different colors of Strawberries

- J-berryグループの「ICHIGO」ブランドはアグリテックプラスの開発した技術で構築されており、グループ（海外への販路に対する協力グループ）のメンバーは、以下の活用が可能
  - 密植栽培と周年栽培の技術
  - オリジナル品種
  - 海外への梱包出荷方法
  - 海外への販路の利用
- 通常、県の縛りで他県では生産できない品種等があるが、技術を通して産地を選ばずにグループ化する事で、多種多様な品種の取り扱いを可能にしている
  - 北海道「ゆきらら」、静岡「きらぴ香」、奈良「古都華」等
  - 今後様々な産地のメンバーが増える事で品種のラインナップも増えていく予定

輸出に関わる取組③カントリーリスクへの対応

輸出時に起こり得るリスクを想定し、回避/対応策を講じる

背景

- 「奈良いちごラボ」では海外への輸出比率が7割を占めており、カントリーリスクが非常に高い状況
- 最近では台湾の残留農薬の問題で少なからずダメージを負っている

中華圏への集中

- 現在の輸出先は中華圏が非常に多く、中国に対するカントリーリスクを想定せずに進める事にはリスクがある
  - 中華圏とは別の商圏への輸出拡大を図る
  - アメリカ、フランス、イギリス、ドバイ、カタール等への少量輸出を開始

残留農薬検査

- 日本は非常に多くの農薬を使用する作型の為、将来的にも残留農薬基準で輸出規制がかかる事を想定しておく
  - 限りなく無農薬で栽培する技術開発を進めている
  - 台湾の残留農薬検査に通るような栽培方法を今季から実践

本日のまとめ

将来を見据え、海外展開を含む
儲かる農業の実現に向けた取組を早期に推進すべき

- 国内マーケットは今後確実に縮小していく事が確実
  - その中で生き残り策を講じるのは限界がある
  - わからない事が多くリスクを感じたとしても、**海外展開を講じていかなければ「儲かる農業」にはできない**し、将来性もない
- 単位面積当たりの収量を伸ばす事も「儲かる農業」には必須
  - 既存の栽培方法を妄信して進むのではなく、**植物の生理生態を理解し、原理原則に基づいた栽培方法を知って実践**することが重要